

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第819号 平成26年10月16日

## 特定の価値観の押しつけ？（1）

道徳の教科化に関して、10月1日付北海道新聞の社説は「価値観の押しつけが心配」と題する一文を掲載しています。

社説の概要は、以下の通りです。

中央教育審議会が、小中学校の「道徳の時間」を正式の教科に格上げする方向で議論に入った。

正式の教科になれば特定の価値観を押しつけかねない。公教育が児童生徒の内面に介入することは認められない。教科化は不要だ。

行き過ぎた規範意識は、多様な価値観を認めて自ら学ぶ姿勢を引き出す本来の教育目的をゆがめる可能性がある。

「生きる価値」「命の大切さ」等について成長期に考えをめぐらせる事は大切だが、それは、教室で答えを与えられるものではなく、普段の学校生活や家族や友人との人間関係、読書等を通して一人ひとりが内省を深めるものだ。

国の関与が強化された検定教科書で道徳を教えれば、教育で国家主義を広く浸透させた戦前のようにならないか。そうした不安が拭えない。

この社説に対して、賛否様々の意見があると思いますが、社会のルールや社会の一員として人々とどう関わって行くべきか、といった事について子ども達を教育する必要はないと考えている人はいないと思います。

もっとも、以前、ある小学校で子どもが茶髪にして来たのを教師が咎めたところ、その子の親が、「茶髪にして何が悪いのか。私の勝手だ」と噛みついて来たというような話を聞くと、皆が社会のルールを教える必要性を感じているのかどうか、自信はぐらつくのですが…。

ところで、私は、こうした道徳に関する議論を見たり聞いたりしていて、いつも疑問に感じる事があります。それは何かというと、道徳教育に批判的な人は、しばしば「特定の価値観の押しつけ」という言葉を使用するのですが、それはどうしてなのだろうという事です。

「特定の価値観の押しつけ」という言葉は、「選択の余地のない形で、ある固定された価値観を、強制的に教え込む」というように理解されますので、道徳教育に対してそうした表現を使用すれば、それだけでネガティブな印象を与える効果は大きいと思います。

しかし私には、「特定の価値観の押しつけ」という言葉の重さの割には、具体的に何を意味しているのか、必ずしも明確だとは思えません。

「特定」と一口にいても、それは誰にとっての「特定」なのでしょう。つまり、私個人にとっての「特定」なのか、地域社会や日本国にとっての「特定」なのか、更には世界にとっての「特定」なのかという事です。

先程の小学生の茶髪の問題に関しても、「小学生なのに茶髪にして登校させるとは何という親なのだろう」と批判的な人がいる一方で、「それは個人の自由で良いのでは」と肯定的な人もいます。このように、ある物事に対してどう評価するかという物差し「価値観」は、個々人の内面にあるものですから、「価値観」そのものは、常にある人にとって「特定」されたものです。

また、「郷に入れば郷に従え」という言葉があるように、事の善悪を判断する基準等の価値観は、地域や国によっても一様ではありません。

このように「価値観」は個人や地域、国によって異なるからこそ、しばしば互いの「価値観」と「価値観」はぶつかり合う事になります。先日も、この通信で取り上げたように、子どものはしゃぐ声を騒音と感じる人もいれば、元気で良いと感じる人もおり、身近なところでも、そうした「価値観」のぶつかり合いは生じます。また、それは個人と個人の関係のみならず、国と国との関係でも同様です。日本政府は現状の世界の秩序を維持する事が大事だと考えていますが、中国政府は南沙諸島に対して自国の主権を主張し、周辺諸国と争っている事は皆さんもご承知の通りです。

勿論、現実の社会は、「価値観」と「価値観」が何時もぶつかり合い、ぎすぎすしている訳ではありません。「特定」の価値観が集合している社会の中で、人々が円滑に生きていくための知恵が働いています。それが、最大公約数的な価値観、つまり社会の普遍的なルール（規範）であり、それは「道徳」といい換えても良いと思います。

「公序良俗」という言葉がありますが、これもそうした社会のルールであり、国家間の問題に関していえば「国際法」というものも、平和的な国際秩序の維持のために人間の英知が生み出したルールに他なりません。

世界の大哲学者であるデカルトは、道徳に関して「私は数多くの意見のうちでも、最も穏健なものだけを選ぶことにした。その理由は、極端なものは全て悪しきものであるのが常であるので、いつも穏健な意見の方が実行するのに最も便利だからである。また一つには、その方が、私が間違っただけの一つの極端な意見を選んだために別の極端な意見に従わねばならなくなった場合よりも、真なる道から外れる事が少なくて済むからである（同氏著「方法序説」から）」と述べています。

「穏健な意見」が「社会のルール（規範）」とイコールであるとは必ずしもいえないかも知れませんが、私は、人々の多くが円滑な社会の運営のために容認している

「社会のルール（規範）」は、デカルトのいう「穏健な意見」といっても良いのではないかと思っています。

例えば、地域でごみの分別に取り組んでいる時に、「自分はそんな事は面倒だから従わない」という考えは明らかに「極端な意見」というべきで、そのような考えの持ち主は地域の方々から冷たい視線を浴びる事を覚悟しなければなりません。

「道德教育」に批判的な人は、国が、道德教育の名の下に国民の意識をある特定の色に染めようとしているのではないかと懸念しているのかも知れません。

勿論、日本がそんな国にならぬよう、国民一人ひとりには鋭敏で賢くあらねばなりません。道德教育が本来目指しているものは、そんな偏狭なものではなく、子ども達に「自立した一人の人間として人生を他者と共により良く生きる人格を形成する」事にある事を理解して欲しいと思います。

道德教育は、子ども達に対して、人々が互いに尊重し合い、協力し合いながら社会を形作っていく上で共通に求められるルールやマナー、規範意識等を身に付けさせると共に、人間としてより良く生きる上で大切なものとは何かといったテーマについて、時には悩み、葛藤しながら、考えを深めさせる営みといえます。従って、道德教育は、 $1 + 1$ は2であるというような、一つの答えを一方的に教え込めば済むというものではない事は、当然の事です。（塾頭：吉田 洋一）